

ともかくもお正月

会長 采女博文

大きな鏡餅を飾る習慣もかび臭い餅をぜんざいにしてなんとか食べる習慣も失って久しい。小さな丸餅で年神様を迎える。万事略式である。平凡な、戦火に逃げ惑う人々を思うと、ぜいたくな、日常である。

昭和30年代の農村地帯の暮らしの思い出のなかで、今の街での暮らしを照らす癖があり、周りから少し距離を置かれる。高度経済成長の波が及ぶ前の農村社会である。テレビが普及する前の電化製品がない世界。裸電球に傘が付いた奴とラジオしかない。家屋にコンセントとかない。

近ごろ、玄米で保管された古い米が食べられるか否かが話題になった。日照りの夏、河川氾濫による冠水、台風による稲穂の倒伏をかわして、賑やかな収穫の秋。千歯扱ぎ、足踏み脱穀機で稲穂を粳にする。秋、どうも新米だあ、と祝って食べた記憶はない。当時は米の割当供出・予約売渡制度（配給制度）の時代だし（1泊2日の修学旅行は米2合の持参だった。）、農家でも米を潤沢に食べられたわけではない。麦飯、アワ飯、芋飯はごくふつうだった。温かいうちはどれもおいしい。冷えてもおいしいのは白飯だけだけれど。ネコ飯（みそ汁の中にはさばさ冷やご飯を浮かべる）にすればどれもおいしい。

ただ、思い出補正なのか、玄米らしい玄米を食べた記憶がない。雨ニモマケズの世界（一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベ）だと玄米食がふつうのはずだが。玄米そのものを食べる習慣はその頃すでに失われていたのだろうか。思い出せない。いりこ（煮干し）が、取り出されることなく、そのまま味噌汁の具になっていた食生活からすれば、栄養分の豊富な玄米が食されておかしくないのだが。

いたずらに齢を重ねたせいか、時折子どもの頃にお世話になった方々を思い出すことがある。今ごろ思い出しても恩返しするのは無理というもの。そのせいか世の中には恩送りという言葉もある。誰かから受けた恩を、直接その人に返すのではなく、別の人に送る。その送られた人がまた別の人に渡す。恩が世の中をぐるぐる回っていくこと（井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室・新潮文庫から）を意味するらしい。送るにしろ渡すにしろ何かしら器量が要りそうで、しょんぼり。

ともかくもお正月。去年今年貫く棒の如きもの（虚子）と信念の変わらぬ様を確かめるか、ご破算で願いましては、と心機一転を図るか。春ごとに気持ちは揺れる。